文教大学女子短期大学部研究紀要44集，77－86，2000

洋式生活を教えた人々（第3報）
－生活文化の伝道を担った来日婦人宣教師の姿勢－

川　崎　衿　子*

People Who Taught about Western Life Style (III)
－The Attitude of Women Missionaries－

Eriko Kawasaki

Ⅰ　はじめに

わが国の洋風住宅の普及および洋風生活の浸透の過程は、伝統的和風との対立、そして受容、調整の上で発達してきた。その過程においてアメリカ・プロテスタント各派から派遣された宣教師の伝道活動の影響が認められることは既に何回かの報告を重ねてきた[1]。

多くの試練に耐えながらも、使命感に燃えた宣教師達は派遣先の各地で献身的に生活改善に取り組み、さらに西洋近代の精神をもって家庭観、家族観に新しい思潮を吹き込み、わが国の旧来の価値観に大きな革新をもたらした。宣教師館を開放し、そこでの生活様式を人々に積極的に展示して洋風生活への憧憬と羨望を引き出した。

明治・大正・昭和初期における宣教師来日の動向は、アメリカ・プロテスタント伝道史から概観すると次の2期に区切ることができる[2]。第1期は明治開国前後からの1800年代の約30年間とされる。この時期には卓越した地位と能力をもつ宣教師が来日し、大都市を活動拠点として文明開化期のわが国の教育・文化面に多大な功績を残した。これに続く第2期はわが国では明治後半となる1900年代とされるが、この期に来日した宣教師達の多くは聖職階級ではない平信徒で占められ、彼らは自らの意志で海外伝道を求め、地方のキリスト教未開の地に拠点を定めた。

本報告では地方を伝道拠点とした宣教師達の活動に焦点を当て、彼らが洋風生活浸透に果たした役割を考察するものである。

Ⅱ　アメリカの婦人宣教師派遣政策

1．婦人宣教師派遣の背景

アメリカ・プロテスタント海外伝道の起源は1800年代初頭といわれる。1810年、神学校の学生を発起人として創設されたアメリカ海外伝道局（American Board of Commissioners for Foreign Missions 通例アメリカン・ボードと表記される）は、1812年インドに宣教師8人（男性5人とその中の妻3人）を送り出した。この一団をもってアメリカ人が海外派遣を試みた最初の宣教師達とされている[3]。以後アメリカン・ボードはハワイ、

＊ ライフデザイン学科教授

パレスチナ、西アフリカ、東南アジア、中国、ミクロネシアと進出したが、これと時を同じくして既存の各教派も世界各地へと宣教師を派遣し、アメリカの海外伝道熱は一気に高まった。これらの発展を支えたのが婦人宣教師であった。彼女達はキリストの福音はもとより、女性ならではの視点から、信仰を中心にした家庭のあり方、家庭の中心となる女性の役割、子どもの養育の責任、施しの精神、役に立つ人材となることなどを説いてまわった。

もともとアメリカのピューリタニズムは、伝統的に家庭における宗教教育を重要視してきた。特に女性は家庭においては信仰の教導者とされ、妻、母親は思考・行動において常に敬虔な信仰者として家族の手本となることが求められた。彼女達の思いやり深く道義的で、自己犠牲も厭わぬその姿こそアメリカ社会の良心の象徴として敬意がはらわれた。

19世紀のアメリカの家庭が目指したのは、それらの女性達に率いられた家庭、即ちクリスチャン・ホームの建設であり、その実現努力がさらに女性達の生活行動様式を生み出し、女性の活動領域を明確化させたものと考えられる。キリストの教えに従順にふるまい、家族を愛し、慈善と博愛の心をもって地域や社会に奉仕する、その領域の中で女性の能力は最大限発揮され、家族からも社会からもその存在は尊重された。

さらに教会や地域を拠点として団結した女性達は、異教徒を教化する宣教師の仕事を礼賛し、宣教師の活動支援を行い、献金運動を展開していた。当初は小規模であったこのような活動は次第に拡大発展し、より集約・組織化されたのが婦人伝道局であった。婦人伝道局は、特に婦人宣教師の海外派遣を積極的に援助し、独身であるならばその旅支度と旅費を整え、給料を支払い現地活動の資金を準備し、さらには婦人宣教師の選定も行った(4)。

各地域での婦人伝道局の運動はアメリカ社会の海外進出の時勢に沿いつつ波及的に発展し、1861年超教派で婦人一致海外伝道局(Women's Union Missionary Society of America for Heathen Lands)が設立された。この頃には、結集した女性の力は海外伝道に対して大きな影響力をもつまでになった。

19世紀前半においては、婦人宣教師の職業的な地位はいまだ確立してはおらず、従ってそのほとんどが宣教師の妻、準宣教師として海外に派遣されていた。婦人宣教師の職分が認められてはいなかったにもかかわらず、海外伝道においては開始時から夫婦単位の派遣が基本として行われていた。そのため海外出発の直前に慌ただしく相手を決めて結婚することも多く、夫婦であることが海外派遣においては重要な条件とされた。それ程迄に妻帯が奨められたその大きな理由は、任地での生活安定とともに、婦人宣教師への期待があった。

婦人宣教師の役目は夫の仕事の補助、家政、育児などで、当時の女性一般に与えられていた家庭の仕事が主であったが、一方で現地生活を通してその土地に馴染み、同化をはかり、女性特有のつきあいを通してキリスト教への警戒心をほぐし、人々と交わりを結ぶことであった。「アジアでは女性の社会に男性は軽々に近づけない。だとすれば宣教師の妻が果たすべき伝道の補助者としての役目は単なる補助ではない必要不可欠の仕事である。」(5) という通りに、外国人には閉鎖的な派遣先の現地社会に入り込むのに大切であったのは、土地の女性社会と縁をつけることであった。その理解を得るためには、婦人宣教師の存在は不可欠であった。このような状況から多くの婦人宣教師達が無数のアメリカ女性達の献金によって、多くの期待を担ってキリスト教未開の地に送り出された。婦人宣教師に期待されたのは、当時のアメリカにおける家庭の主婦としての姿をそのまま土地の人に見せてキ

リスト教の道徳と文化を知らせることであった。換言すれば、アメリカの主婦としての役割がそのまま婦人宣教師の役割であり、本国でのクリスチャン・ホームを赴任先で展示することによって日常生活からの穏やかな布教の試みが求められた。

南北戦争（1861～1865）後のアメリカの政治、経済、社会構造の変革は、さらに女性の新しい行動様式を生み出すこととなった。戦争により夫と息子を戦地に送り出して、銃後を守った妻や母親は、彼らの代理として一家を代表し、家業を引き受け、家族を養う責を負うこととなった。また戦地においては傷病兵の看護と医療活動、物資供給、生活補助などの分野で働いた。その結果今までの女性の活動領域を越える仕事を経験せざるを得ない状況を生みだした。これらの経験の中で女性達は鍛えられ、従前からの小規模な女性の活動領域を公的に拡大する術、組織運営、資金調達、広報宣伝、事務連絡の手腕などを学びとることができた。そして、教会が支援したアメリカの女性の社会活動は新しい道徳的規範を求めつつ、全国的に組織化され、政治性を強めていった。女性の集結した力で女性のために創られた顕著な組織を以下に記す。

1869年　アメリカ婦人参政権協会
1870年　キリスト教福祉員訓練所（ニューヨーク）
1874年　婦人キリスト教禁酒同盟（クリーヴランド）
1885年　シカゴ伝道訓練学校（シカゴ）
1893年　万国コロンビア博覧会・婦人委員会「婦人館」「子供館」主催（シカゴ）

このような女性の活動が組織化されるに伴い、職業をもつ中流階級の女性も増加していった。19世紀後半には家庭の機能が外在化し、家事サービスが職業化・専門化したことで職種も多様化した。教養を備えた中流女性の職業として教師、看護婦、社会福祉員、医師などに注目が集まり、その一つに宣教師の職が加えられた。近代化、南北戦争を通じ、キリスト教会の後盾を得た女性の社会参加はより積極的になり、その趨勢に乗って職業としての地位を獲得した婦人宣教師達は、より一層の活躍の場を求めて世界各地へと送り出された。第1期の1800年代後半に来日した婦人宣教師の多くが独身で卓越した指導者であり、使命感をもち職務遂行を果たしたのも、彼女達の地位が職業として安定していたことが大きいと思われる。

第2期の1900年代になると、宣教師の派遣先は都市中心から地方へと分散、拡大した。それと前後して以前とは異なる宣教師群がみられるようになった。既に婦人宣教師は職業として認められ、身分保障も確実なものとなり、その活動は全世界に及んでいた。前時代では宣教師の夫と宣教師ではない妻の一組の宣教師夫妻が多くの場を占めていたが、時代が下るにつれて夫も宣教師、妻も独立した職業宣教師という二人揃って宣教師夫妻の来日が目立った。高学歴で、しかも前時代の準宣教師ではない宣教師の資格をもつ妻は、自らの独立した宣教師の仕事を赴任先で試みようと望んだ。

既報において述べた数々の宣教師達、例えば1899（明治32）年に来日し水戸、下妻を活動拠点としたビンフォード夫妻、1912（大正1）年に来日し近江ミッションに加わったウォーターハウス夫妻、1915（大正4）年に来日し、ポール・ウォーターハウスの妹マデリンを妻としたニコルソン夫妻も夫と妻、各々が宣教師であった。その仕事ぶりは布教に精力的に励むと同時に、クリスチャン・ホームとして是認される家庭を公開し、清廉な生活態度で社会に対し積極的に連帯しようとする家庭のモデルを築いた。

2．婦人宣教師が残した果実

海外伝道の成功には、女性への布教をいかにすべきかという問題と大きく関わっていた。西洋社会からみたアジア諸国の異教の国の女性は男性に虐げられ、社会的に抑圧を受けた許し難い存在と映った。その女性を救済し、自分達が認められていると同じような立場にまで女性の地位を引き上げることを婦人宣教師達は自らの任務とした。

キリスト教の女性観は旧弊社会の道徳観、倫理感に満足できぬ者への求道と重なった。現実の苦難故にキリスト教に救いを求めた者もあったであろうし、あるいはキリスト教を根底とした西洋の学術・文化に先進性を認め、西洋文明・科学への畏敬や憧憬からクリスチャン精神の吸収を熱望した者、さらには、自由平等の精神を基礎としたミッション・スクールの門を叩いた者など、様々にキリスト教の感化を受けたであろうが、その多くは、中流以上の比較的恵まれた階級出身者や、その子女達であったと推察される。特に婦人宣教師に心酔した日本の若い女性達の多くは、封建的道徳からの解放を望み、自らが社会の改革者となるべきという自覚、自負を抱いた者が少なくなかった。後に、彼女達の中から女性の地位の向上の啓蒙を行い、婦人解放運動の先駆者や社会改良運動の指導者などが現れたことは広く知られている[6]。一般的に宣教師にとって日本人への布教は他の国の場合と比べるとそれ程の困難ではなかったという。

E.O.ライシャワー（Edwin Oldfather Reishauer）[7]は、明治期に来日した宣教師が想像していた以上に日本の青年達が知的で、向学心に燃え、勤労意欲をもっていたことに感嘆したと実証しており、それが後に日本の近代化に結びついたとして次のように述べている。「当時の日本は文字の読み書き能力が高度に普及しており教育に対する強い一般的な意欲があった。事実、江戸時代の読み書き能力は、アジアのいかなる地域にもまさるものであり、そのころのヨーロッパの水準に匹敵するものであった。」[8]

さらに小檜山ルイは婦人宣教師にとっても日本の女性は指導しやすく、布教しやすい対象であったと次のように述べている。「西欧文化の吸収と自己研鑽に積極的な、真面目で教え易い少女たちに囲まれた婦人宣教師は、その様々な困難にもかかわらず、比較的容易に仕事に着手し、それを拡大・発展させることができた。国際的に見て、日本のステーションの婦人宣教師の割合が高かった理由の一つは、明らかに彼女たちの仕事が順調に発展したことであった。」[9]

高邁な志を持たずとも、宣教師の家に親しく訪れる機会を得た青年達は異文化に触れる喜びを覚え、さらにアメリカ人による英語の教授は新時代に生きる実感を高めたことでもあろう。特に婦人宣教師に敬愛の情を寄せ、西洋の生活文化に傾倒した若い女性達は、宣教師の住まい、宣教師館の雰囲気そのものから多くを学び取った。西洋風の家事技術、衛生管理、育児、洗濯、裁縫、調理など、衣食住に渡る生活全般の指標がそこには具体的に示されていた。洋風生活の実地見学・訓練は、彼女達の将来の家庭建設の夢へとつながった。

ところでわが国の建築史とりわけ洋風住宅系譜において、宣教師および婦人宣教師の実践活動が果たした役割についての論究は極めて希である。洋風住宅普及を促したプロテスタンティズムの背景には宣教師達の動向を認めながらも、彼らの足跡は水表面に浮上されることはなく、中央のアカデミックな洋風住宅系譜の本流からは無縁のものとされてきた。本流を形成した建築界、学術界の系譜から概観すると、本研究が論究をする洋風生活浸透に貢献した宣教師達の実践は、主流に沿う傍流の一つに例えられよう。同時代の学術を立脚点とする建築界の住宅論、住宅設計理念、

洋風生活の啓蒙とは異なった「洋風生活浸透」の地盤を宣教師達は確保していたと考えられる。

Ⅲ　洋風生活浸透と宣教師の存在意義

1．1900年代の宣教師達の苦悩

明治後半から大正、昭和の三代を通して長期間日本各地に定住し、福音の灯を揚げ、布教に教育に大半の生涯を捧げた宣教師達は数多い。ミッション系女学校を創立した来日宣教師の出自国はアメリカが筆頭で次いで、イギリス、カナダからの派遣がこれに続くが、来日宣教師の詳かな数を把握するのは難しい。

第2期目に当たる宣教師達が直面したのは、先人の時代とは異なるキリスト教に対する嫌悪の雰囲気であった。第1期の宣教師達は明治政府が先導した欧化主義の時代の中で活発にその活動を展開することができた。しかし、1889（明治22）年2月の「大日本帝国憲法」、1890（明治23）年10月の「教育ニ関スル勅語」の発布などによって近代天皇制が形成されつつある社会は、第2期目の宣教師達に寛容ではなかった。前時代の欧化政策への反動から反外国、反外国人、反外来宗教の風潮が顕著になりキリスト教への反感は顕著なものとなった。このような時代の中で宣教師達は新たな対応が迫られることになる。彼らはいかにすれば有効な伝道を行えるかという問題について真摯な反省をしている。

1891（明治24）年から22年間大阪に定住したバプテストの宣教師ワインド（William Wynd）[10] は「初期の時代には我々宣教師は説教の重要性を過大に評価し、人々と普段の生活において接触する事の持つ力を最小視していたように思える。彼らは説教するように教育を受け、説教するように委託され、彼らにとっては神の力となっている福音を説く為に来日したのであった。」[11] と述べ、宣教師が優越の立場から派遣先の人々に信条を投与するような態度を戒めた。そして日本人の習慣をよく理解し、赴任先の人々と共に生きることを選んだ宣教師達は、地域の実情に適した伝道技術を開拓し、その地において独自の根を下した。

既に報告をしたW.M.ヴォーリズ、ウォーターハウス夫妻、ビンフォード夫妻等も、このような姿勢をもち教派的な独善に陥ることなく、柔軟な姿勢を具備して各々の赴任地でその責務を果たした。

ビンフォード夫妻と同時代に同じように地

ビンフォード夫人と共働した女性達

ミス・ブゼル

域に尽くした婦人宣教師Ａ．Ｓ．ブゼル（Annie S. Buzzell）は1892（明治25）年に来日、11月に仙台に赴任した。直ちにブゼル来仙より前に着任していた3人の婦人宣教師達が作った私塾に加わった。その私塾はやがて学校へと発展するが、ミス・ブゼルは前任者の跡を継いで1899（明治32）年、その校長となった。同年11月に私立学校令が施行され、それに伴い同校は私立尚絅女学校（現尚絅女学院）として設立認可を受けた。以後1919（大正8）年までの27年間同校の校長として教師の職を全うし、さらに仙台を本拠に東北各地に伝道を行った。その後一時帰国の後1920（大正9）年12月からは青森県遠野を赴任地とした。この時ブゼルは54才であった。仙台に長期に定住し、土地の人々の尊敬を受け、高い評価を与えられつつ賜暇により一時日本から離れ、再び来日した時には、より遠隔な土

ビンフォード夫妻	ミス・ブゼル
	1892（明治25）年来日11月仙台に赴任
1899（明治32）年来日11月水戸に赴任	1899（明治32）年私立尚絅女学校校長になる。
1911（明治44）年８月水戸友会教会堂建設	
	1919（大正８）年７月賜暇により帰米
1920（大正９）年11月賜暇により帰米	1920（大正９）年休暇が明け12月遠野に赴任（54才）古い民家の離れ部屋の一部に借りて住まう。
	1921（大正10）年４月教会堂を使用して聖光幼稚園開園
1922（大正11）年休暇が明け10月下妻に赴任（ガーネー57才、エリザベス46才）古い民家を借りて住まう。	
1923（大正12）年６月下妻宣教師館竣工夫妻の住居となる。	1923（大正12）年６月宣教師館竣工ブゼルの住居となる。
1927（昭和２）年10月下妻小友幼稚園開園	
1929（昭和４）年１月農村青年修養会設立指導に当たる。	
	1932（昭和７）年８月農村福音学校開設指導
	1935（昭和10）年７月遠野を退去、引退
1936（昭和11）年11月引退離日アメリカに帰国	1936（昭和11）年２月仙台に移り、その地で８月に生涯を閉じる。

地遠野を選び、そこを第二の拠点として再出発した。このブゼルの経歴はその伝道活動、思考・行動、実績においてビンフォード夫妻と共通性が認められる。

前頁に両者の略歴対照を試みた。

両者とも最初の赴任地よりも、一旦アメリカに戻り再来日しての第2の赴任先で存分の伝道活動を行っている。最初は所属教派の意向に従って派遣されたが、そこでの経験や多くの人との交わり、滞在中に知り得た情報を生かして第2の赴任先選定を自らの判断で行うことができた。まず民家を借り受けて土地の人々と同じような条件のもとで生活し、今後の活動の基盤を固め、1、2年後には自分達の住居兼地区センターともいうべき宣教師館を建設している。さらに幼稚園を開設し、母の会、教会の婦人会を中心に地域に尽くし、人々と触れ合い友好の絆を結んだ。

ミス・ブゼルは宣教師館を拠点にさらに広く事業を展開し、英語学校、バイブル・クラスを開設した。ビンフォード夫妻が二人で各々に役割分担をしたことをブゼルは有能な協力者を得て単身で成し遂げることができた。また農村伝道を開拓し、旧弊な規範に縛られる青年達に新しい時代の指標を提示したことでも両者は同じ道程をたどった。

貧困、重労働にあえぐ農村青年に農村経営、農作業の合理化、生活改善の具体的方法を教授し、同時に精神修養の機会を設けた。ブゼルは1930(昭和5)年、休暇帰国中にシカゴ大学神学部で研修を受け、その際に提出した論文「An Adventure in Christian Social Service in a Rural Town in Japan」の中でそれまでの遠野での約10年間の日常的な活動を57項目数え上げ記している[12]。同じくガーネー・ビンフォードはその回想録の中で下妻時代の伝道記録を57項目に記している[13]。

両者に共通するのはいかに土地の人々に馴染んでいったかを示す日々の細やかな努力である。それを最もよく表す記録をミス・ブゼルの57項目の第20番目と第28番目に見出すことができる。

「20. 家を見学したい人には誰でも見せる。外国人がどのように生活しているのか、椅子、ベッド、テーブル、ストーブ、その他興味あるものを見たいと言う人が時々訪ねてくる。彼らはヴィクター蓄音機はもちろんそのレコードについても話を聞いているに違いない。」

「28. 次に来る訪問者の為に瓶に入れたドーナッツとクッキーの箱をいつも一杯にしておかなければならないし、お茶も出さねばならないが、それは朝か昼、或いは夜かもしれない。また私が何か贈り物を貰った時には、使いの人を空手で帰すことをしない。」

自分達の住まいを開放すること、訪問者をもてなすことは宣教師の布教技術の中でも重要な一方法であった。大正期から昭和期にかけての布教困難な時勢において宣教師達の苦悩はいかに人々を自分達に引き寄せるかという問題であった。

2. 活動の基本姿勢

明治期以来の欧化主義の波に乗って宣教師が穏健に受認されていたのに対し、1900年代初頭、特に地方でのキリスト教伝道には多くの試練が課されていたことは想像に難くない。しかし、いかに大きな障害があろうとも使命感に燃える宣教師達はそれを乗り越える強い意志があった。日本人の思考、行動を観察し、それにふさわしい伝道方法の具体を模索し、その様相は前時代と大きく変化していった。聖書研究、伝道集会、日曜学校、教会活動などでのキリスト教教義の説教だけでは布教は及ばないとして、人々への生活事象に目を向けた。ブゼルは遠野に着任したばかりの頃、その活動の基本姿勢を次のように記している[14]。

1.人々の本当の生活と文化を出来るだけ学

ぶこと、即ち住民の一人として人々と一緒に生活する事で彼らの信仰を理解し尊重すること
2.すべての人の友、役立つ隣人となり、家庭を開放すること
3.子供達から仕事を始めること
4.教会を全ての活動の中心とすること、即ちすべての事を教会の働きとすること

ビンフォードの記録にはブゼルが記したような基本姿勢を明記したものはないが、その足跡と成果とを照合すれば両者は非常に近似した信念によって行動を進めたことが解る。とりわけブゼルとエリザベス・ビンフォードには婦人宣教師としての共通性が認められる。人々に対する温かいまなざし、指導的態度よりも奉仕的態度からの地域への接近、貢献はより多くの人に感銘を与えた。宣教師達の活動を支えた「奉仕の精神」は、キリスト教布教の多領域で共通して認められ、それ故に宣教師の生活そのものが、キリスト教理解の対象ともなった。

宣教師の活動範囲は多領域に渡るが、中でもキリスト教主義の学校には生涯の大半を教育に奉げた宣教師・教師を数多く見出すことができる。これらの人々は単に教育に携わっただけではなく、生徒達に「生き方」を考える主導性を与えた。久山康はその著の中でキリスト教主義学校で重視された礼拝や集会はややもすれば形骸化される危険性をはらんでいるが、それを免れ、また克服したきたのはそのような教師が存在していたからであるとしている。そしてそれらの教師達が生徒達に大きな影響力をもったのは奉仕の精神を自らが発揮して、奉仕活動をした点にあるという。そこには信仰厚く人間的にも指導力に富み、舎生を厳しく鍛えている外国人教師がいた。キリスト教教育は直接的な教義・聖書の授業のほか、寄宿舎での日常生活そのものがさらにキリスト教教育教授の場であった。「どのキリスト教主義学校史をひもといても、キリスト教教育の特質として人格形成をうたい上げているところが多いが、それはあくまで目的であって、それらが鍛えられる地盤は、奉仕の精神と活動に帰着する。」(15) 礼拝や集会がそのままでは形式にすぎず、生徒達の「生き方」を模索する心を強く響かすことはできなかったであろうが、「それを生き生きとさせたのは教師達の生活そのものである。それは具体的には『奉仕の精神と活動』に他ならない。」(16)

どの地にあっても、どの場を与えられようとも私利私欲から離れ、社会に尽くすことを義務とした姿勢は、日本に定住し、その功績を讃えられた宣教師達の共通項であった。

赴任先の日本人社会の中に入り込み、人に役に立つことを為し、家庭を開放し、その暮らしぶりを開示し、子ども・青少年の育成に関心を向け、精神、肉体の全生活を信仰のもとで制御してゆく宣教師達の伝道実践は、尊敬や親愛の情を深めるばかりでなく、旧来の日本人の価値観に刺激をもたらした。その先進性を認めることによって、西洋文化、洋風生活様式に対する態度は受容的となり、宣教師の暮らしぶりの模倣を促し、それらの行為を通して洋風生活の概念は具体化されたものと考えられる。

Ⅳ　おわりに

建物としての住宅は、洋風生活の概念形成に格段の効果を発揮した。外観、内観、室内装備・家具調度品、設備機器の数々は、西洋文化や洋風の生活様式を具体的に理解する重要かつ必要不可欠の条件であった。これらの実物展示は洋風生活の近代性、先進性の伝達に大きく作用し、人々を圧倒させる要素に満たされていた。西洋を知り、洋風住宅の実際、

洋風の生活様式に接触しうる立場にいた先端の人達は、新しい時代に相応しく日本が目指すべき生活目標を西洋の生活様式に求めた。

大正デモクラシーの時代の波の中で、生活改善、住宅改良運動は住生活の洋風化という最善の課題を発見することによって多くの人に生活革新の必然性を強く印象づけた。そのような時勢から、この時期に多く出現した洋風住宅あるいは和洋折衷住宅などは、わが国の近代住宅の変遷や周辺の動向解明の重要な証左となっている。

しかし海外生活や海外の最新情報とは無縁な一般の人々、とりわけそれらから疎遠な地方の人々にとっては、身近に存在した西洋館や宣教師の住宅は異文化体験の貴重な場所であった。ことさらキリスト教未開の地を選び、草の根のように強かに西洋文化の浸透を図ったアメリカ・プロテスタントの伝道政策は、先端情報から離れた遠隔の地において、より一層効果的な実践を積むことができた。

地域に密着し、住民との交流を深めつつ生活指導を試みた宣教師や周辺の伝道者、教導者達は日常生活の隅々にまで介在する旧弊な習慣を改めることを試行し、合理的、科学的な生活態度の養成を目指した。彼らは洋風生活に無知な人々に対して「生活の仕方」から近代人としての「ものの考え方」「人間関係のあり方」などを平易な言葉で語りかけた。それらの言葉は、人々の心に深く入り込み、西洋文化吸収の素地をより柔軟にさせた。

日々の暮らしの中での思考、行動に西洋文化の価値判断基準を知らしめ、具体的に新しい生活知識と生活技術を教えた宣教師達、即ち「洋風生活を教えた人々」の存在は、明治・大正・昭和初期を通して家庭生活の民主化、生活の近代化、洋風化に大きな足跡を残したと考えられる。

脚注

(1) 拙著既公刊報告は以下の通り。
- 洋式生活を教えた人々－近江家政塾について－『文教大学女子短期大学部研究紀要』第34集，1990，PP1-14
- 洋式生活を教えた人々（続報）－エリザベス・ビンフォードから吉田清野へと引き継がれた洋風－『文教大学女子短期大学部研究紀要』第35集，1991，PP71-81
- 住生活の近代化と洋式生活導入の一過程－近江家政塾について－日本生活学会編『生活学1994』ドメス出版，1994，PP47-71
- 住生活の近代化と洋式生活導入の一過程（続報）－近江家政塾が伝えた洋式生活－日本生活学会編『生活学1997』ドメス出版，1997，PP31-50
- ヴォーリズと近江ミッションが伝えた洋式生活－教育事業を中心として－『日本女子大学大学院研究紀要　家政学研究科人間生活研究科』第4号，1998，PP57-68
- 明治・大正・昭和初期における来日宣教師の活動にみる生活洋風化への影響－ビンフォード夫妻を中心として－『日本家政学会誌』Vol.50，1999，No.10，PP65-75
- 1900年代初期の洋風生活浸透過程の一考察－近江ミッションの教育事業を中心として－『日本建築学会計画系論文集』第526号，1999，PP115-122

(2) 小檜山ルイ『アメリカの婦人宣教師』東京大学出版会，1992，PP183-212によると、プロテスタント諸派の日本伝道活動を1859年から明治初期の約20年間を含む30年間を第1期としている。

(3) 前出(2)　PP12-13

(4) 前出(2)　P20

(5) 前出(2)　P19

(6) 例えば鈴木裕子監修『先駆者達の肖像・

明日を拓いた女性達』ドメス出版，1994には財団法人東京女性財団が明治・大正・昭和を通して女性の自立と救貧を目指して活躍した女性達95名を上げているが、そのうち婦人宣教師の薫陶を受けたものは30名を超える。

(7) 1910～1990　宣教師を父に東京で生まれた。16歳まで日本で成長し、ハーバード大学卒業後歴史研究を専門として同大学教授、駐日大使などを歴任。

(8) E.O.ライシャワー『日本近代の新しい見方』講談社現代新書，1965，P36

(9) 前出(2)　P267

(10)1891（明治24）年大阪に配属され、大阪宣教の中心的人物となった。1913（大正2）年、東京転任後においても都市に参入する若者達を伝道の対象とした。

(11)大島良雄『日本につくした宣教師達』ヨルダン社，1997，PP173-174

(12)前出(11)　PP262-268

(13)Gurney Binford『As I Remember It 43 Years in Japan』Friend Book Store, California，1950，PP195-200

(14)前出(11)　P259

(15)大内三郎他『日本キリスト教教育史－思潮編－』キリスト教学校教育同盟，1993，PP39-41

(16)前出(15)　P41